令和６年２月２日（金）　読売新聞（朝刊）千葉版

「防災見直すきっかけに」

DMAT医師ら県民へ訴え

能登地震で派遣

能登半島地震で石川県輪島市に災害派遣医療チーム「DMAT」として派遣された千葉市立海浜病院の医師や看護師らが、読売新聞の取材に応じた。医師の本間洋輔さん(40)は千葉県民に向け、「石川県のことを人ごととは思わず、防災を見直すきっかけにしてほしい」と訴えた。（猪塚さやか）

輪島市には、本間さんと看護師2人、業務調整員2人の計5人が派遣された。1月12日午後4時頃に現地入りし、輪島市役所を拠点に17日まで活動した。医療関係者らの活動先などを調整する「輪島市保健医療福祉調整本部」から要請を受け、自宅や避難所に出向いて被災者の体調を確認。感染症患者も診察した。

業務調整員として参加した薬剤師の古川博則さん(55)は、避難生活で常備薬が切れた被災者向けに薬を準備した。しかし、手に入る薬の種類は限られており、いつもの薬と異なると服用を拒否する人もいたという。古川さんは、「安心して飲んでもらうまでの流れを作ることが大切」と課題を述べた。

本間さんは今回の地震の特徴に、雪と交通の便の悪さを挙げる。亀裂の入った道路、路面から突き出たマンホール、傾いた信号や住宅……。元からないのか地震で壊れたのかは分からないが、街灯もない。夜は暗い山道を走行しなければならなかったという。

5人は、輪島市から約55キロ離れた志賀町のコテージで寝泊まりした。毎日、朝から夕方まで活動した後、2～3時間の道のりを往復した。

「命の危機を感じた」。運転した看護師の渡部光太さん(34)は、「ただでさえ慣れない道なのに、土砂崩れや地割れを隠すように雪が積もり、どこを走ったらよいのか分からなかった」と振り返る。間一髪で陥没を避けたこともあったという。

被災地での活動を経験し、千葉県民に伝えておきたいと思うこともある。本間さんは、「能登半島地震を自分事として捉え、『避難先は？』『外出先で被災したら？』など、身の回りの防災を見直すきっかけにしてほしい」と語った。

千葉市ホームページ「令和６年能登半島地震に対する千葉市の支援・取り組み」

https://www.city.chiba.jp/somu/kikikanri/kikikanri/r6noto_shiennaiyo.html